

「」

靈山遺跡発掘調査概要

—大津市坂本本町・比叡山横川所在—

1978

滋賀県教育委員会

財團 滋賀県文化財保護協会

序

比叡山の横川の山中に所在する懸山遺跡は、滋賀医科大学の慰靈塔建設に伴う確認調査によってその全貌が明らかになった。発掘調査の結果、遺構の保存状況の良さ、規模、内容などから、わが国でも屈指の中世墓地の好資料であることが明確になった。さらに、比叡山延暦寺という歴史的環境は、本遺跡をして文献からは知ることのできぬ中世の歴史の一端を語らしむる可能性を多分に含んでいる。また、出土した信楽焼を主体とする蔵骨器は、陶器の研究に多くの新資料を提供している。

幸いにも、当地に建設される予定であった滋賀医科大学の慰靈塔は、遺跡の重要性を考慮して設計変更がなされ、遺構は保存されることになった。遺跡の保存に尽力された、滋賀医科大学の関係者の方々に厚くお礼申しあげたい。横川の山中には、中世と現代の時代をこえた人々の魂魄が、木々の間に流れる読経を聞きながら眠りにつくことであろう。

発掘調査といえば、原始時代から奈良・平安時代までの遺跡を対象とするようなイメージが強い。そのため本書は、より多くの方々に中世の遺跡がもつ重要性を理解していただくことを目的とし、詳細な記録や考察を除き写真を中心とした概要報告書の形をとった。これを機会に、県下各地にある中世の遺跡の見直しが行われるなら幸いである。

昭和15年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化財保護課長

藤沢守雄

例　　言

1. 本書は、財団法人滋賀県文化財保護協会が、滋賀医科大学よりの委託事業として担当実施した、大津市坂本本町比叡山横川^{よこかわ}靈山遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。

2. 本調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

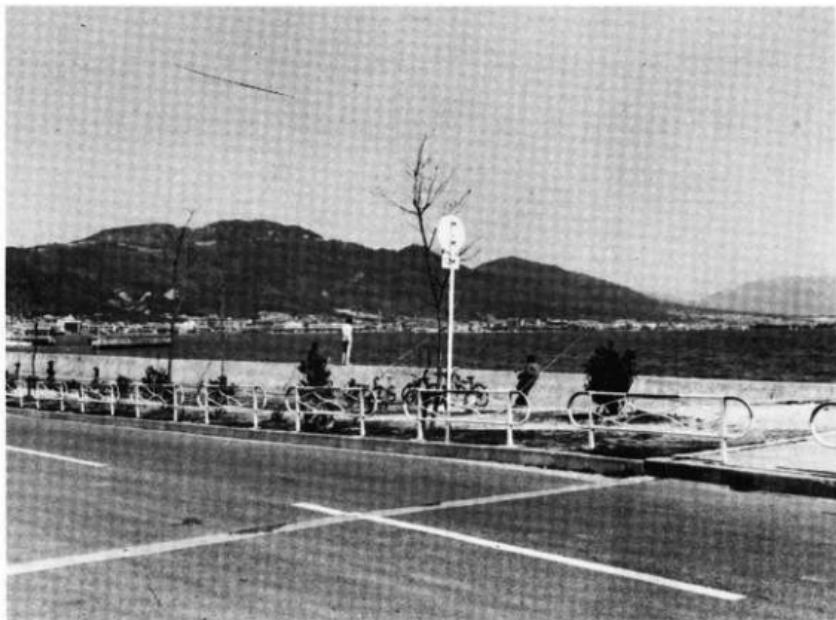
3. 調査は、滋賀県教育委員会技師兼康保明を担当者として、昭和51年12月1日に着手し、昭和53年3月25日に完了した。

この間、滋賀医科大学、延暦寺管理部の協力を得た。また宿泊等については、延暦寺行院から種々の援助をうけた。ここに記して厚く感謝の意を表するものである。

4. 調査にあたっては、山口利彦、上田完二、岩崎茂、加藤達也、勢田広行、奥野宗寛、本田修平、山口順子、酒井和子の諸氏の協力を得た。

また、林博通、丸山竜平、西田弘、景山春樹、水野正好、木下密運、菅沼晃次郎、渋江善光の諸氏には、種々の有益な教示ならびに援助を得た。

5. 本書は、概要であり詳細については後日、正報告書の刊行を予定している。



比叡山遠景

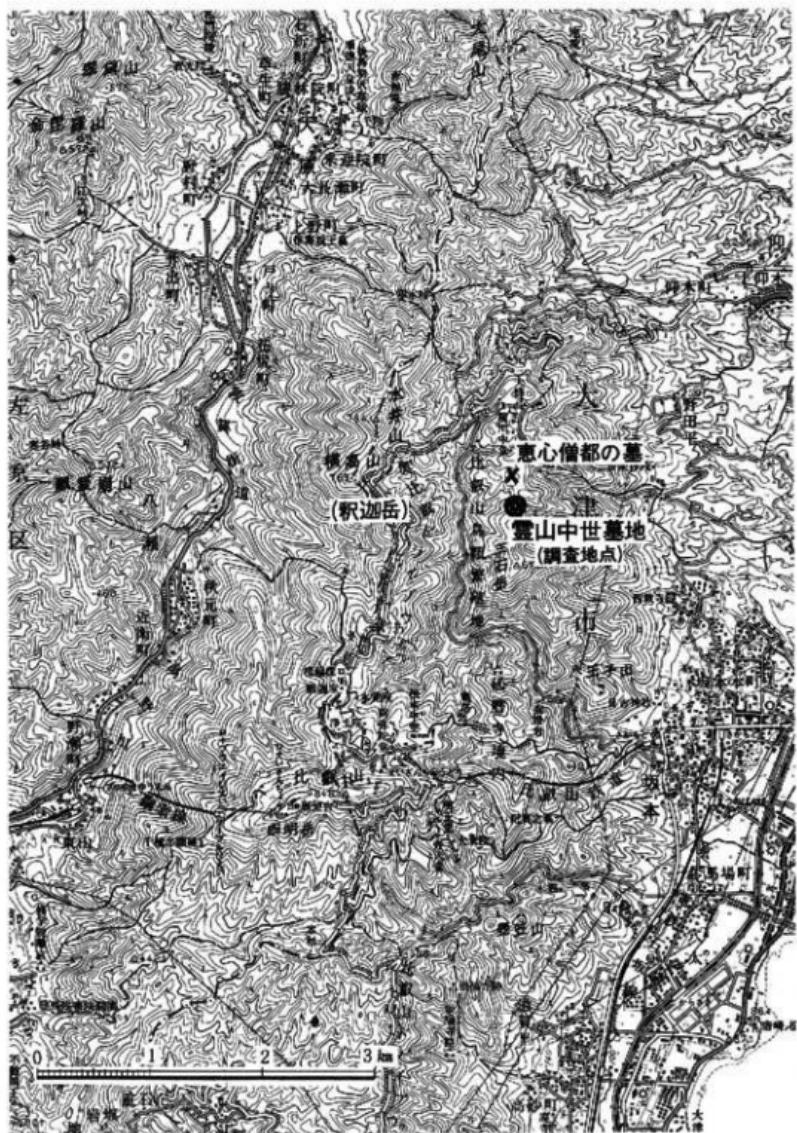
はじめに

京と近江の国境いにつらなる比叡山の歴史は、延暦寺の歴史と言っても過言ではない。

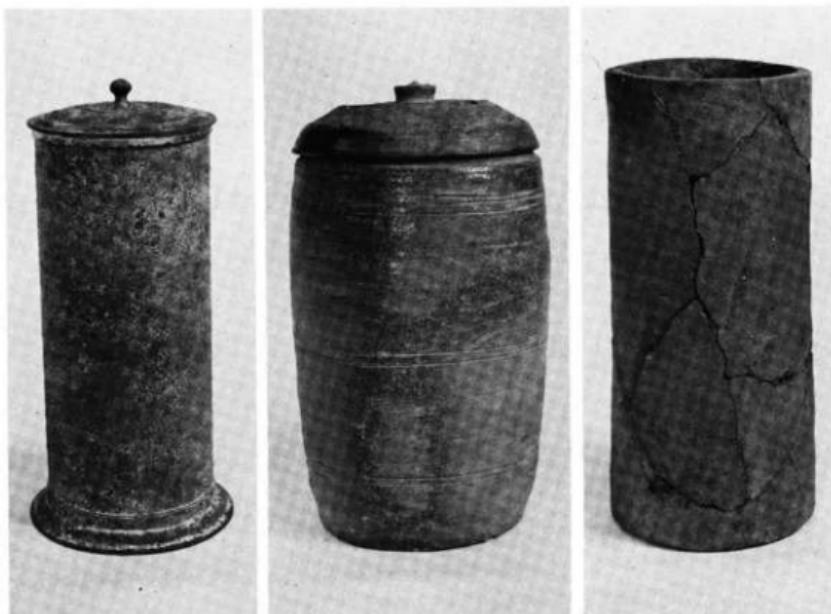
伝教大師最澄によって創建された比叡山寺は、後に嵯峨天皇より延暦寺の寺号を下賜され、教学の殿堂として発展するによんだ。さらに、経済的には広大な莊園をもち、それを背景に強大な勢力となり、政治的にも大きな力を有するようになった。この発展期に、延暦寺を構成する三塔が成立した。

三塔の一つである横川は、9世紀の中頃に慈覚大師円仁によって開かれ、根本如法塔を中心に整備されていった。しかし、それ以後一時衰退したが、10世紀に良源によって復興され隆盛をきわめた。

この延暦寺も時代の流れとともに衰退化がめだち、やがて元亀2年（1571）に織田信長の焼打ちをうけ、全山



遺跡位置図



横川経塚出土經筒

灰燼に帰した。そして、その後天正12年（1584）に豊臣秀吉によって再興がはじめられるまで、人跡を絶ち、荒廃するにまかせた。

織田信長の焼打ちは、伝統ある多くの建物や文物を失わしめたが、その結果、全山の土中に中世の世界を封じて保存することになった。焼打ち後十数年の空白は、三塔十六谷を埋めた多くの堂宇、聖地、墓地などの詳細な場所を人々から忘却させたことは疑うまでもない。そのため、比叡山で行われた過去何回かの発掘調査は、我々に多くの新事実や資料を提供している。今回発掘調査を実施した「笠山遺跡」も、そうした人々から忘れ去られた遺跡の一つである。こうした遺跡の検討が、これまでとは別な視点からの延暦寺の歴史像をうかびあがらせる重要な鍵を握っている。



横川の山並み（南より）

第Ⅰ章 遺跡の発見

比叡山延暦寺は、東塔、西塔、横川の三塔から構成されており、このうち横川は比叡連峰の北端に位置している。横川には現在、根本如法塔、横川中堂、四季講堂など数字の建物をとどめるにすぎないが、それら諸堂の周辺には今もかっての堂や僧坊の跡をしのばせる平坦地が数多く残っている。また、横川経塚群として、考古学上著名な場所でもある。

調査の発端

この横川の地に、国立滋賀医科大学が慰靈塔の建設を計画されたが、史跡地域、自然景観、僧坊跡などに対する配慮から、その予定地の決定は再三変更がなされてきた。このような経過をへて、横川の諸堂や僧坊跡群などから、かなり南へへだたった山中に候補地が求められた。この地点は、僧坊跡の伝承や人工的な平坦地も無く、回峰行者と登山者がまれに通る以外は、ほとんど人も入ら



遺跡地近景（北より）

ない林の中であった。また、慰靈塔を建立した場合におこってくる景観の問題についても、特に支障の無い場所でもあった。

遺跡の確認

昭和51年11月29日、慰靈塔建設予定地について、本委員会は関係者（滋賀医科大学・延暦寺・滋賀県文化財保護協会）の同道を得て、埋蔵文化財の確認調査を実施した。現地を踏査した結果、僧坊跡と思われる人工的な平坦地や、遺構などは無かったが、尾根の支脈の鞍部に草木に埋もれた石塔の残欠が発見された。また、その際に陶器の破片も数片採集された。そのため、当該地は中世に遡る墓地である可能性が濃厚になってきた。

しかし、これまでに墓地の伝承も、蔵骨器などの遺物についても報じられていない。また付近の林道の傍に集められている一石五輪塔についても原位置は明確ではな



遺跡地近景（南より）

く、中にはかなり離れた場所から運ばれてきたものもあるといわれており、遺構の残り具合について否定的な意見も強かった。そのため、遺構の残存状況を把握し、遺跡の性格を明確にしたうえで、慰靈塔の建設に支障がないかどうかを再度協議することになった。以上のような経過をへて、昭和51年12月2日より発掘調査を開始した。

第Ⅱ章 遺跡の位置

比叡山の地形は、大宮川の深い渓谷をはさんで、西側には大比叡岳から峰道を通って水井山まで、北にのびる尾根が走っている。また、東側にはその尾根と平行して、三石岳から南北にのびる尾根がある。横川は、このうち東側の尾根の北端にあたり、坂本へ流れる大宮川の源にあたる。大宮川は、横川中堂、元三大師堂付近に端を発して南流する。その途中、西塔の駅迦堂から流れる支流

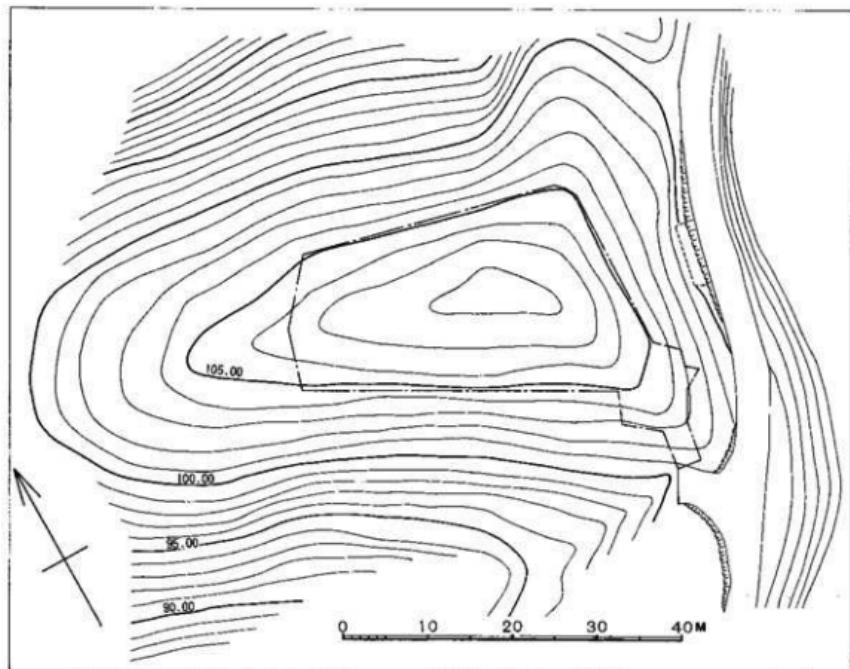


遺跡地盤の石塔群

と落合で合流する。流れの方向はこのあたりから東に変わり、衣掛岩、八王寺山麓、日吉神社をへて坂本に至っている。この大宮川に沿った谷道は、比叡山の中では傾斜も緩く、現在林道に利用されているが、古くから横川参詣の道としても利用されている。谷の各所には、諸堂、僧坊の跡をしのばせる平坦地が見られ、土器や石造品などが散乱している。この大宮谷の道が、かつては延暦寺諸堂への主要な参道の一つであったことは、疑うまでもなかろう。

発掘調査地点は、大宮川の源である横川の諸堂から、三石岳にむかう尾根づたいの林道を、約0.8kmほど南下したところに位置する。横川から林道伝いに諸施設を見て行くと、秘宝館（伝華台院跡）、恵心堂が今ある建物としては最も南に位置し、続いて大宮谷にむかって僧坊

跡が見られる。これより南には、覺超僧都の墓、恵心僧都の墓（現在の横川の墓地）があるだけで、これまで何ら注目される場所ではなかった。ことに当該地付近は、地形的にもとりたてて特長もなく、したがって細かい地名もつけられておらず、付近一帯を「靈山（りょうぜん）」と呼んでいただけであった。ただ、林道のわきに集められた一石五輪塔や小石仏が、回峰行者によって「靈山の积迦を拝む」とされていることなどから、この地を恵心僧都（源心）が平安時代に建てた靈山院の故地とする説もある。また山中の伝聞として、付近より大宮川につき出した尾根上の林の中に、石造宝塔の残骸が埋もれているともいわれている。



調査前地形実測図

第Ⅲ章 調査の経過

発掘調査は遺構の広がりと、残存状況を的確に把握するため、トレーナによらず、慰靈塔建設工事の際に削平をうけると考えられる地域の表土を全て除去し、全面調査を実施した。なお調査にあたっては、山口利彦、上田完二、岩崎茂の諸氏を調査員に得、現場の作業には延暦寺管理部の協力をうけたほか、諸査期間中の宿泊、食事などで行院のお世話になった。記して謝意を表したい。

第1次調査

調査はまず樹木伐採の後、木の葉などが堆積して腐植した層（ピート層）の除去をおこなった。さらに工事用のポイントを利用して、支脈の背と南北の斜面に土層観察用のセクションを残し、表土の除去を開始した。この間に明らかになった石塔類のうち、原位置を動いているものについては、測量図に記入して後、番号をつけて除いていった。



調査開始・抜根作業

調査が進行するにつれて、墓地の旧況がしだいに明らかになってきた。その結果、墓はポイント30から50にかけての南斜面に形成されていることが判明した。ただこの時点では、地上施設が損壊していたため検出された蔵骨器を除いては、石組、石塔の基礎の下を掘り下げて調査することは行わなかった。

中間報告

遺構の全貌が明確になった昭和51年12月21日に、関係者に現地で説明を行った。

調査の結果から判断して、

① 中世の墓地として、まとまりをもった保存状況の良好な遺跡である。

② 出土遺物（蔵骨器、土師質土器、石造品）と歴史的背景から考えて、墓地の上限と下限をおさえができる。



調査前の状態（東より）

③ 延暦寺の寺域内に営まれた墓地であることから、被葬者の階層を推定できる。

など、今後中世の墓制、葬制を知るうえで重要な遺跡であり、保存すべきであることを申し入れた。

その後協議の結果、予定地の変更については困難であるが、遺跡部分については保存するよう大幅に設計変更をすることで合意した。ただ、現状のまま埋めもどしを行った場合、蔵骨器が盗掘されるおそれがあるため、出土した蔵骨器は全てとりあげることになった。

調査はその後、旧地表部分についての地形実測や、遺物、石塔をとりあげる前の造構実測を行ったが、途中雪のため昭和51年12月27日にいったん中断せざるをえなくなった。

第2次調査 昭和52年3月、雪どけを待って15日より調査を再開し



2号墓・石列の調査

た。調査は、実測を完了して後、石組みや石塔の基礎部分について精査して、地下遺構および蔵骨器の確認を行った。また、すでに確認されていた蔵骨器については、とりあげと掘方の再確認を行った。それらの作業が終了して後、遺構実測図を補足して、現場をうめもどした。

現状

現在、墓地は延暦寺によって、機会あるごとに供養がなされ、現代によみがえっている。

また、慰靈塔は昭和52年夏に完成し、横川山中の雲山の地に、莊嚴な雰囲気をかもしだしている。



遺構実測作業点描



調査終了後の東斜面



第IV章 遺跡の立地

遺跡は、横川から三石岳にむかって伸びる尾根筋から、西—大宮谷に突出した小支脈（最高所 640m ）の南西に形成されている。この支脈の背は、最高所付近にわずかに高まりがあるほかは、それより西約 25m ほどまで比較的なだらかな地形である。しかし、さらに西へ進むと、傾斜は急になり、そのまま谷へ向かって下降する。東面についても、最高所付近から琵琶湖側の山腹は、 30 度以上の急傾斜である。このほか、支脈の南北は、隣接する各々の支脈によって谷を形成している。

また造墓にあたっては、自然地形をたくみに利用しながら、鞍部から南斜面にかけて上段二段に整形を施した跡が認められる。ことに下段の平坦地は顕著で、犬走りを思わせる。これが墓地内において、個々の墓へとむか



調査終了後の北斜面

う枝道の役割をはたしている。

道 現在林道は、遺跡地付近では東面の630mの等高線に沿って設けられているが、それ以前は尾根伝いに杣道があり、回峰行者などが利用していたようである。ところが、こうした南北に走る道とは別に、墓地に通じる古道の跡がわずかに確認できる。それは、支脈の背の西側に認められる小平坦面（大部分は調査地域外）から西斜面で確認でき、斜面地に墓の入口の目印として利用されていたのではないかと考えられるような岩場もある。おそらく、大宮川沿いの僧坊より墓地に至る、東西に伸びる墓道があったのであろう。これと同様なことは、「恵心僧都の墓」を中心とする横川の墓地でも認められる。この地点も、一時中絶はあるが中世以来の墓地であることから、かつては横川から尾根伝いに各墓地への道があ



遺跡地の北より西方を望む

ったのではなく、大宮川沿いの道を幹線として、そこから各々の墓地に通じる支道があり利用されていたのであろう。

遺跡地からの眺望は、周囲が樹木にとり囲まれている現状では最悪で、わずかに北側の「恵心僧都の墓」付近がながめられるのみである。ただ、樹木の繁茂の条件が異なり、ある程度の視界があった場合、東側は頂部によってさえぎられ、墓地から琵琶湖側を見ることはできない。それに対して西側は、稜線方向に玉体杉、やや北西に釈迦岳といった、西塔の北側に位置する特長的な地形を眼前にのぞむ好環境である。

遺跡地付近から、回峰行者が「笠山の釈迦を拝む」とされているのも、あるいはこうした地形、配置とも関連しているのかもしれない。



横川より仰木を望む



東側頂部の石

ちなみに墓へ通じる道の比較を行った「恵心僧都の墓」付近の眺望は、ほぼ西に駒込岳をのぞみ、東側の琵琶湖方面も比較的眺望は開けている。そういう点では、調査地点よりも、面積も広く、また眺望もすぐれ、位置的には良い占地をしていると考えてよいであろう。

第V章 遺構

本調査の対象地域のうち、遺構は南側の斜面に限って形成されていた。北側の斜面には、遺構だけでなく、遺物もほとんど出土していない。また東側の頂部は平坦であるため遺構の存在が予想されたが、調査の結果、石組みの残骸らしき小石と土師器の皿の小破片などが発見されたことにとどまった。こうした石や遺物は、すでに一度動かされたもので、かってそこに何らかの遺構が所在していたことを推定させるだけであった。ただ、調査後に、



石塔類検出状況（東より）

石造宝塔の出土

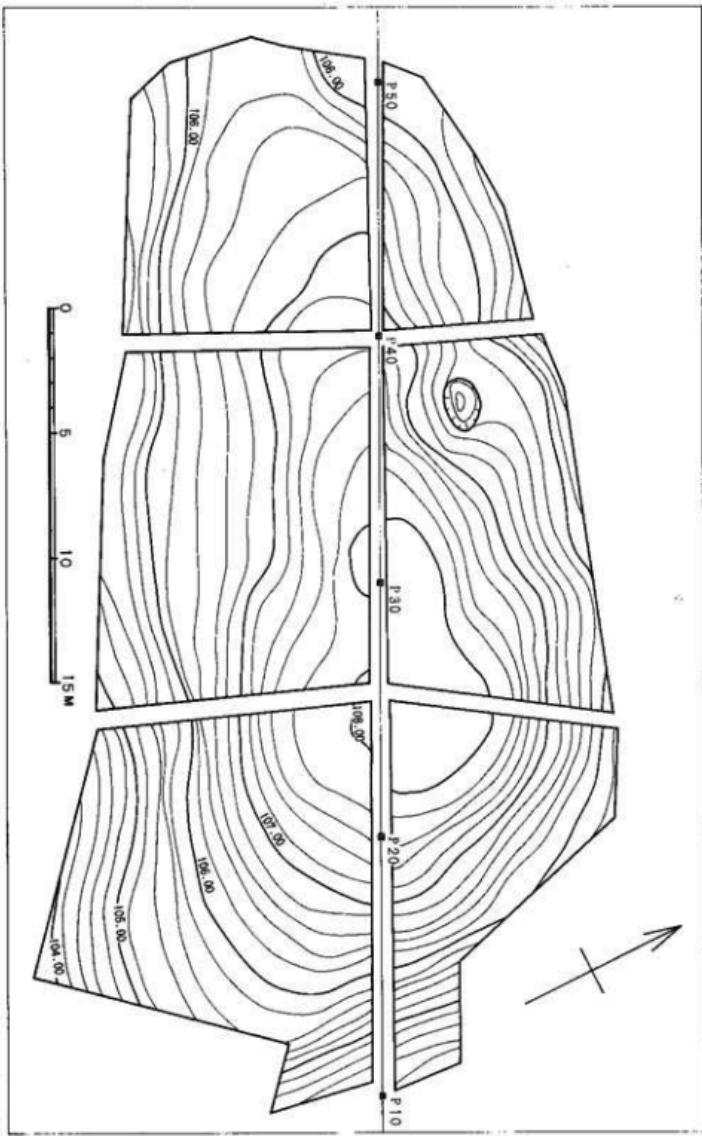
工事のため斜面の木の切り株を動かしたところ、木の根にひっかかっていた石造宝塔の笠と台座が発見された。このことから考えて、頂部の平坦地には、宝塔が建ち、出土した小石はその基礎の一部ではなかったかと推定している。

中世墓地の造成

遺構の形成された南斜面は、概ね等高線に沿うように、上・下2段にわたり犬走り状の平坦地が設けられていたようで、この部分に蔵骨器が埋置されていた。

火葬墓

蔵骨器の埋め方については、まず蔵骨器を入れるための土塙を掘り、そこへ正位置あるいは上下逆転させて蔵骨器を埋めるだけである。また特記すべき外部施設はなく、おそらくその上かすぐそばに石塔や石仏を置いたものと考えられる。各々の出土状況のうち、注意をひいたものについて見てみよう。



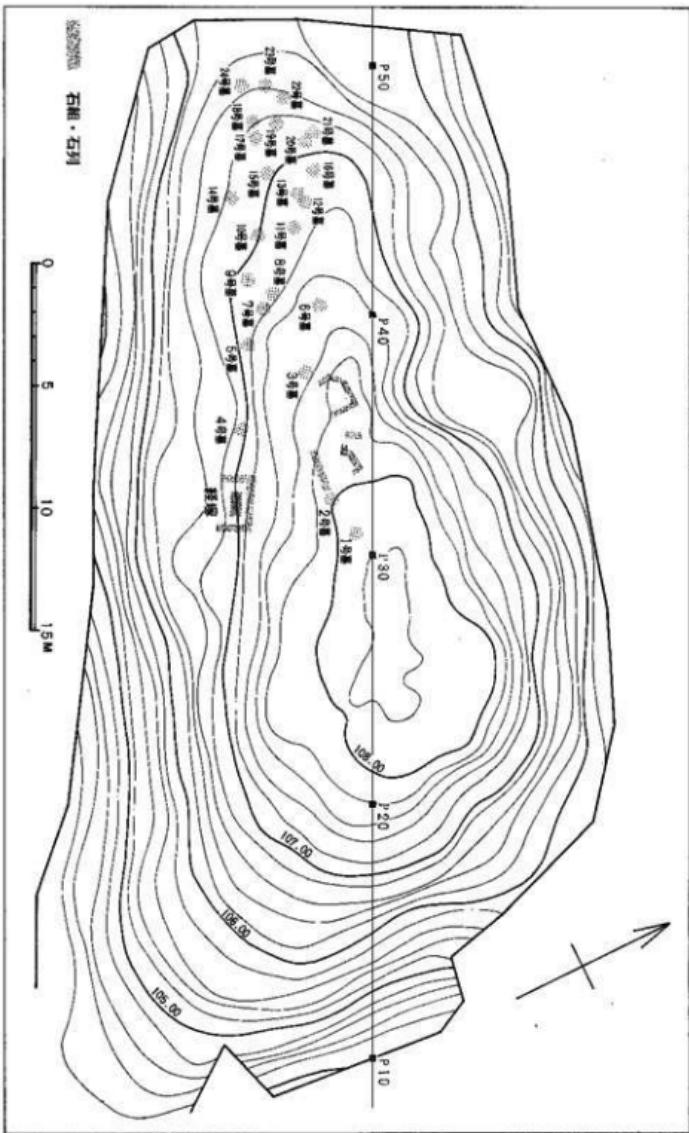
表土除去後地形実測図



調査前の南斜面（西より）



調査前の南斜面（東より）





石塔類検出状況（西より）



石塔類検出状況（東より）

遺骨器検出状況（東より）



(1号墓) 瓦質の大型の鉢に火葬骨を納め、常滑の大甕をうつぶせにかぶせる。尾根に近いため外容器の底部欠損。

(2号墓) 常滑系の頸部以上を故意に欠いた壺の上に、信楽のすり鉢を蓋にする。蔵骨器本体は、出土時においてはバラバラで、各部の位置などに不自然さがあった。また人骨は検出されなかった。出土状況から見て、木の根による搅乱か、整理坑の可能性もある。

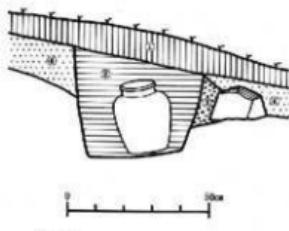
(3号墓) 頸部以上を故意に欠き、底部に穿孔し、土坑に逆さにして納める。上部になる底部の穿孔には、土師器の皿で蓋をする。

土師器皿の蓋と同レベルで、蔵骨器の前面にあたる位置に供献用の土師器の皿が検出された。

(4号墓) 常滑の大甕で高さ約55cm、最大径約60cmを測



蔵骨器検出状況（東より）



7号墓断面図

り、底部に穿孔。胴部の最も横に張る部分の高さまで、火葬骨と灰が充満していた。

(5号墓) 本遺跡唯一の舶載品であるが、四耳壺の耳を故意に2カ所欠いている。

(12・13号墓) 本遺跡中、唯一の2基近接する状態のものである。表層を除去するとすぐに出土したため、両者の土塚については判らなかった。12号墓は蓋に石を用いる。13号墓の瓶子は口縁部を欠くが、出土状況から見て埋置後破損したのか故意か不明。

(8号墓) 口径の小さい、口縁部のやや下方に縁帯をめぐらす二重口の小さい肩の張った壺を倒置する。底部は破損が著しかったが、斜面より出土した破片が接合し復原できた。その結果、底部が穿孔されていることが判明した。3号墓に似た埋置を示している。



7号墓蔵骨器出土状況



1号墓 檢出状況



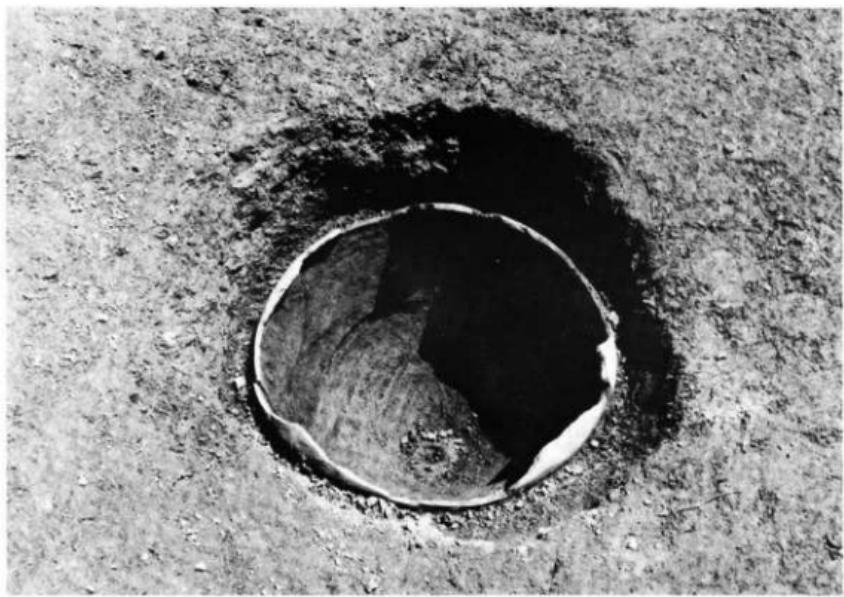
1号墓 外容器







4号墓检出状况



4号墓完掘状况

(14号墓) 西側に集中する蔵骨器群の中では最も大きく、高さ約45cm、最大径約50cmを測る。底部に穿孔はなく、また口縁部を故意に打欠いたりはしていない。容器の大きさのわりには火葬骨は少なく、ほとんど土と入り混った状態で出土する。

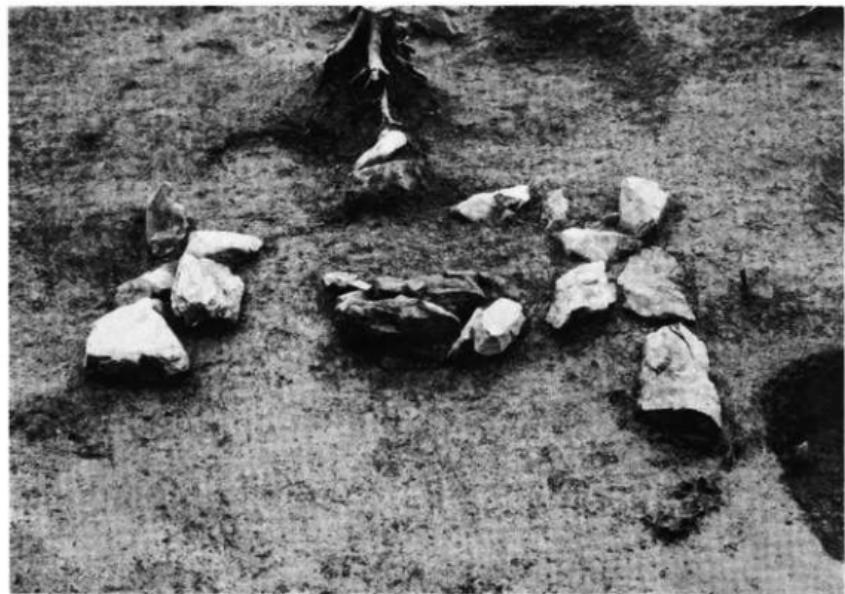
蔵骨器の位置で注意をひいたことは、丘陵頂部に近い東側の上段・下段は、埋置された地点がある程度の間隔を保ちゆとりをもっているのに対し、西側へ行くほどその間隔がつまり雑然としてくる。ことに調査範囲の西端の傾斜のゆるい平坦部では、この乱れが目につくようになる。おそらくこれより西側は、地形的にみて墓地がさらに広がる様子もなく、当初計画された墓域が完全に満たされた結果生じた現象と考えられる。また、本遺跡出土の石造品中、比較的新しい時期に編年される一石五輪



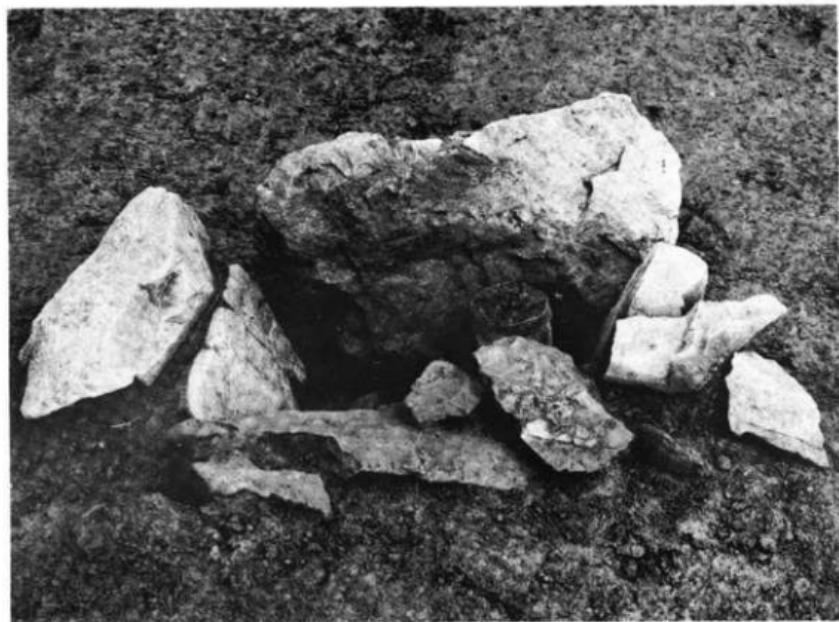
蔵骨器出土状況（上段より下段を望む）



軽塚検出状況



台座除去後の状況



経筒出土状況

塔が、この地域に多いことも先に見た造墓の乱れとも関連しよう。

造墓の規格性の問題と関連して、墓地の東端に営まれた経塚と、整理坑と推定される土坑の問題がある。

経塚

南斜面下段の東端 — 西側の谷からこの墓地へ入ってきの場合一番奥にあたる — に位置し、ゆるやかな斜面の傾斜を利用して作られている。「匁」字形に囲む石列の中央に横長の石組みがあり、その中に青銅製の経筒を納めていた。石組みの上には「凸」字形の台座が置かれており、かつてはその上に何らかの構造物があったことが推定される。経筒は、石組み内の西壁に置かれ、蓋は筒の北側に立てかけられたような状態で検出された。経筒以外の遺物は何も出土しなかったが、石組み内の東側の空間がかなり広いことから、あるいはここに何か有機

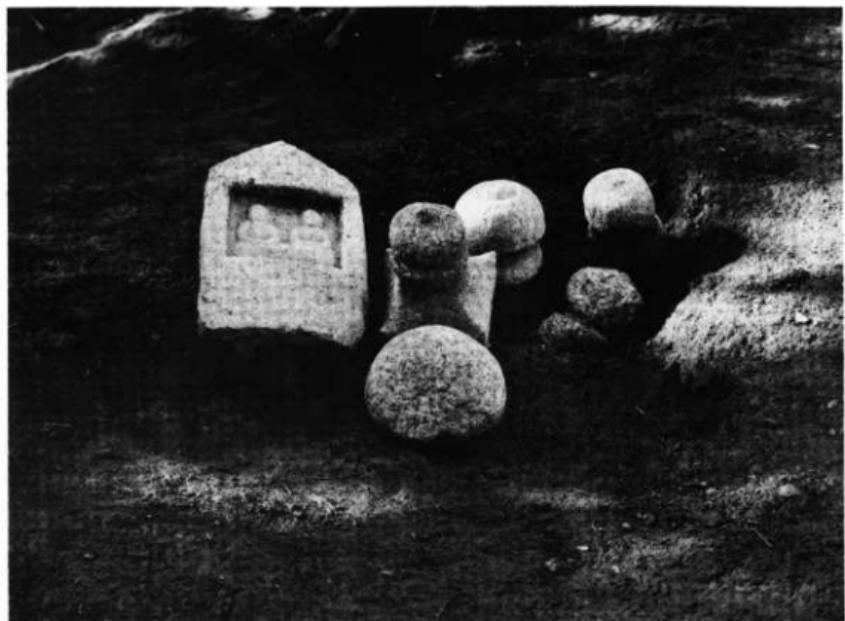
質の遺物が納められていたとも考えられるが、推測の域を出ない。

土坑

土坑は下段の各所で 5 カ所と、上段と下段の中間の斜面で 1 カ所、計 6 カ所で検出された。そのうち、旧地表の窪み、木の根による擾乱と思われるものが 2 カ所ある。それ以外のものについては、土坑内に石塔の残欠や土師器の皿、鉄器、漆器などの遺物があり、人工的に掘った坑内にそれらを入れた可能性がある。ただ、遺構の保存が決定した段階で、工事によって破損のおそれのある土坑 5 以外は完掘せず、その概要を知るにとどめた。土坑 5 の調査では、土坑内の中央部に土師器の皿が置かれた状態にあり、本遺構が墓地内において何らかの役割をはたしていたことをうかがい知ることができる。また完掘してはいないが、土坑 2、3 のように数個体分の石塔が



土坑 2 発掘状況



土坑 2 検出状況

無雜作に埋められ、かつ鉄器、土器片（藏骨器の破片も含む）、漆器などが出土することから考えて、ある時期に墓地内で行われた整理に伴うものではないかと考えている。また、これらの土坑については、出土遺物から、木櫃などの棺を納めた土塚ではないかとの意見もある。

広場

調査地域の西端の平坦部は、西側によると藏骨器の出土が減少することから、未掘部分をも含めて、谷から墓地に登ってきた際の祭場的な役割をもった広場の可能性がある。同様な機能をもった広場の例は、大阪府河内長野市金剛寺の中世墓地においても認められている。
森

以上の各遺構がたがいに関係しあって、墓地の機能をはたしていたのであろう。

※『天野山金剛寺中世墓地発掘調査概要』（金剛寺坊跡調査会
1975）



土坑 1

第VI章 遺 物

藏骨器

ほぼ完形で埋置されていたものと、斜面および土坑内で破片として出土したものがある。後者については、埋置されていた旧位置から動いているとはいいうものの、接合によって復原できたものも数点あった。

信楽

器種は、信楽の壺が最も多い、出土した藏骨器の大半を占める。その他の器形としては、甕が1点と鉢が3点出土している。すり鉢の中には藏骨器の蓋に使用されたものもある。甕は常滑にくらべると小さく、高さも約45cmほどの中型のものが1点ある。常滑は高さ約55cm以上の大甕が2点と、常滑系と考えられる壺が2点ある。このうち大甕の1つは、うつぶせにして外容器として使用されていた。瀬戸は瓶子と鉄軸の四耳壺が各1点、舶載品としては青磁の四耳壺が1点ある。その他に、瓦質の大鉢と、いわゆる火消壺形をしたものが各々1点ずつ出

常滑

青磁

瓦質土器



4号墓調査点描



2号墓



3号墓

藏骨器埋納状況の復原

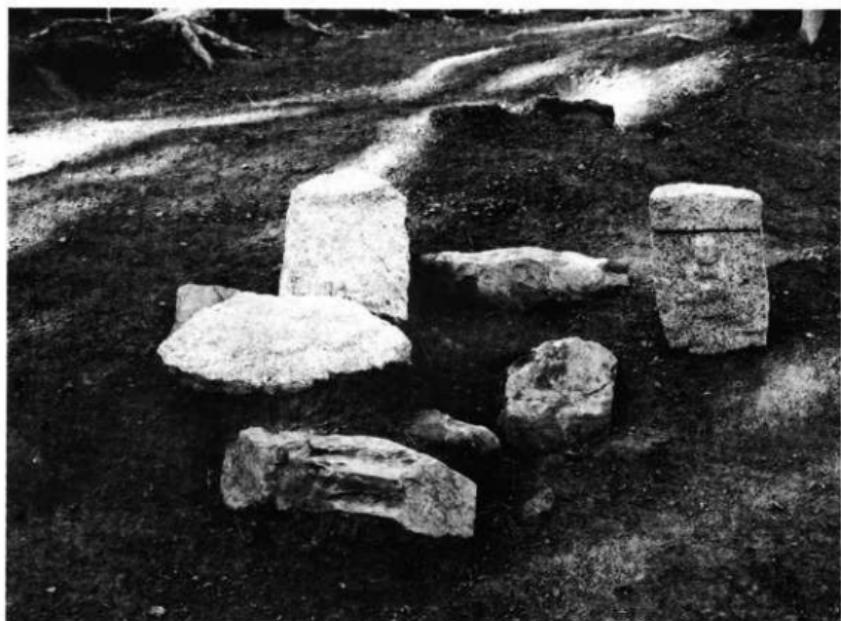
土している。

経筒 青銅製のもので、特に何の装飾もない。腐蝕がはげしく蓋はとりあげ時に破損した。そのため現段階では内容物の調査を行っておらず、経筒か納骨器かは不明である。

供獻用土器 全て土師器の皿で、平底で口縁が外反するだけの特色的ないものと、底部が上げ底になるものとがある。中に底部が穿孔された小皿があり注意をひいた。同様な皿は現在も使用例があり、孔を利用して竹に刺し、野外での燈明皿に利用している。

出土状況は、ほとんど斜面に流れ落ちたものであるが、中には藏骨器の埋置された前や、藏骨器の蓋に使用したものもみられる。

漆器 土坑 3 内より漆器梶の皮膜の小破片が多量に出上した。各部分の復原から、おそらく 1 個体と考えられる。木質



南斜面石造品出土状況

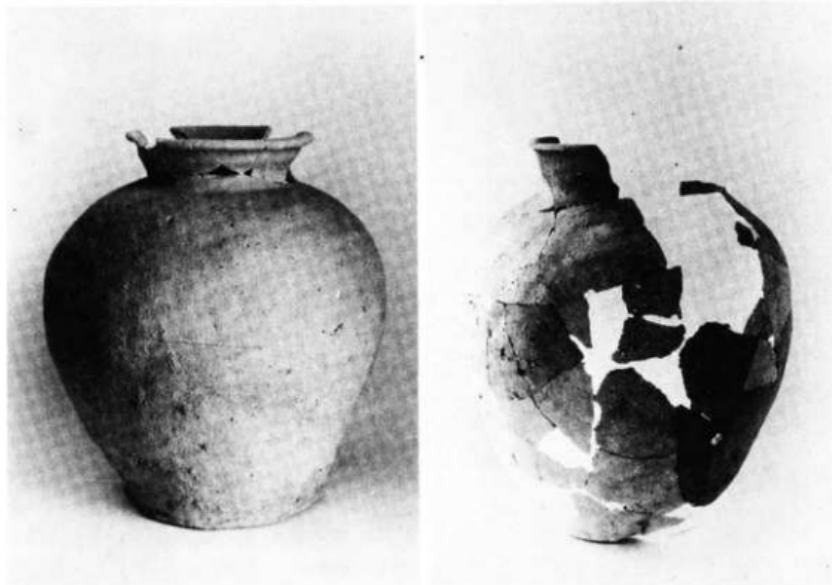
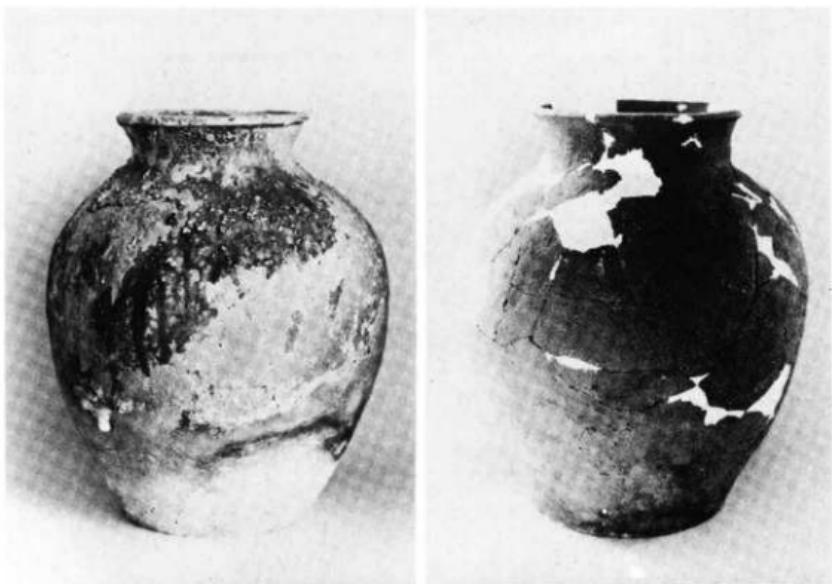
部はすでに腐蝕して失われていたが、比叡山独特の多湿な気候が、偶然皮膜のみを土中に保存しうるような環境を生み出したのであろう。

鉄器 土坑2内より木質部の付着した鉄釘が出土しているが、腐蝕が著しく形態をほとんど留めない。

石塔類 五輪塔 台座の一辺が約30cmほどの小型の組合せ式の五輪塔の残欠が多い。台座は14点出土したが、その多くは原位置を動いたものである。

一石五輪塔 約20点出土したが、その多くは原位置を動いているものと思われる。銘文の確認できたものは2点あり、一つは「キリーク」の種子、他は「逆修、慶大徳」で、台座に認められた。

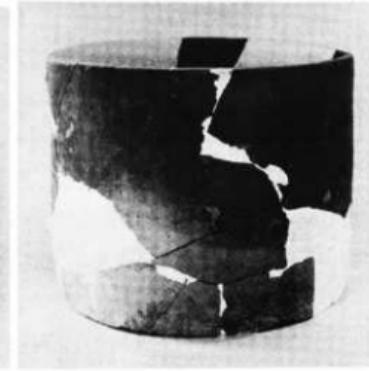
五輪塔板碑 主頭形の板碑の中央に五輪塔を薄肉彫りしたもので、1基のもの2点、2基のもの1点、4基のもの1点が出



藏骨器 1



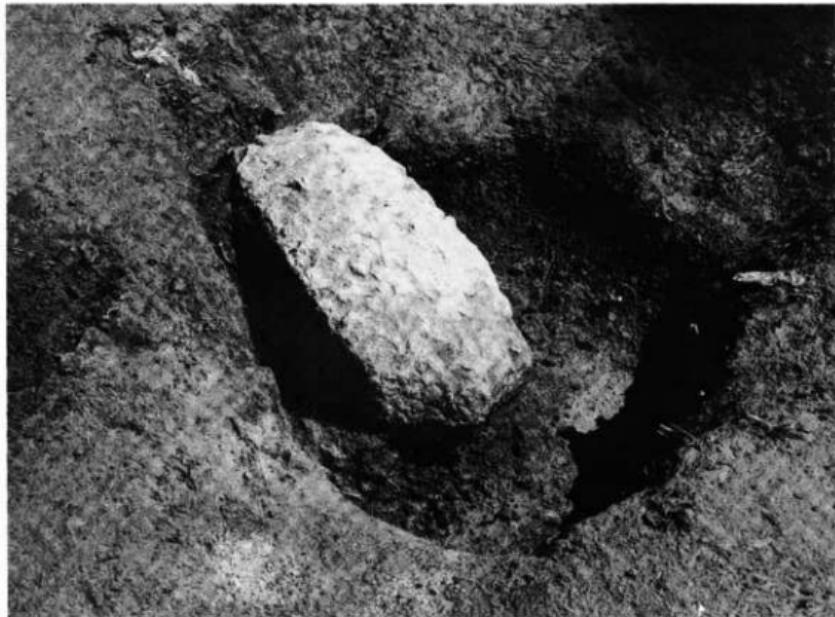
藏骨器 2



藏骨器 3



藏骨器 4



土坑 3

土した。このうち 4 基彫込んだものは、圭頭部に 2 条の沈線を施し、下部に 2 基ずつ 1 組にした蓮華座をレリーフしている珍しいものである。

石仏

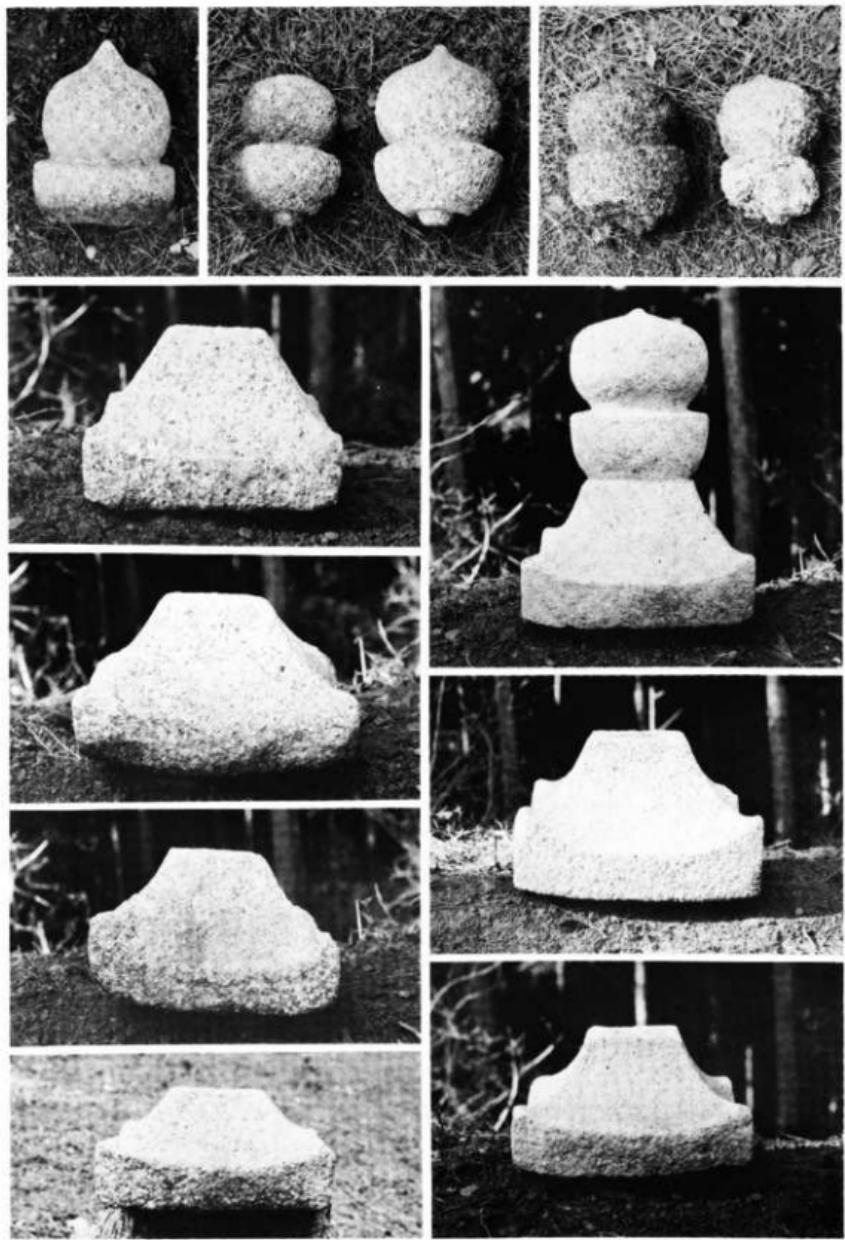
圭頭形のものと舟形のものと大きく 2 種あるが、前者が 6 点、後者が 2 点である。五輪板碑と同様に 2 体彫込んだものが圭頭形に 2 点みられた。像様は風化のため細部までは判別しがたいが、坐像で定印を結んでおり阿弥陀坐像かと思われる。

宝塔

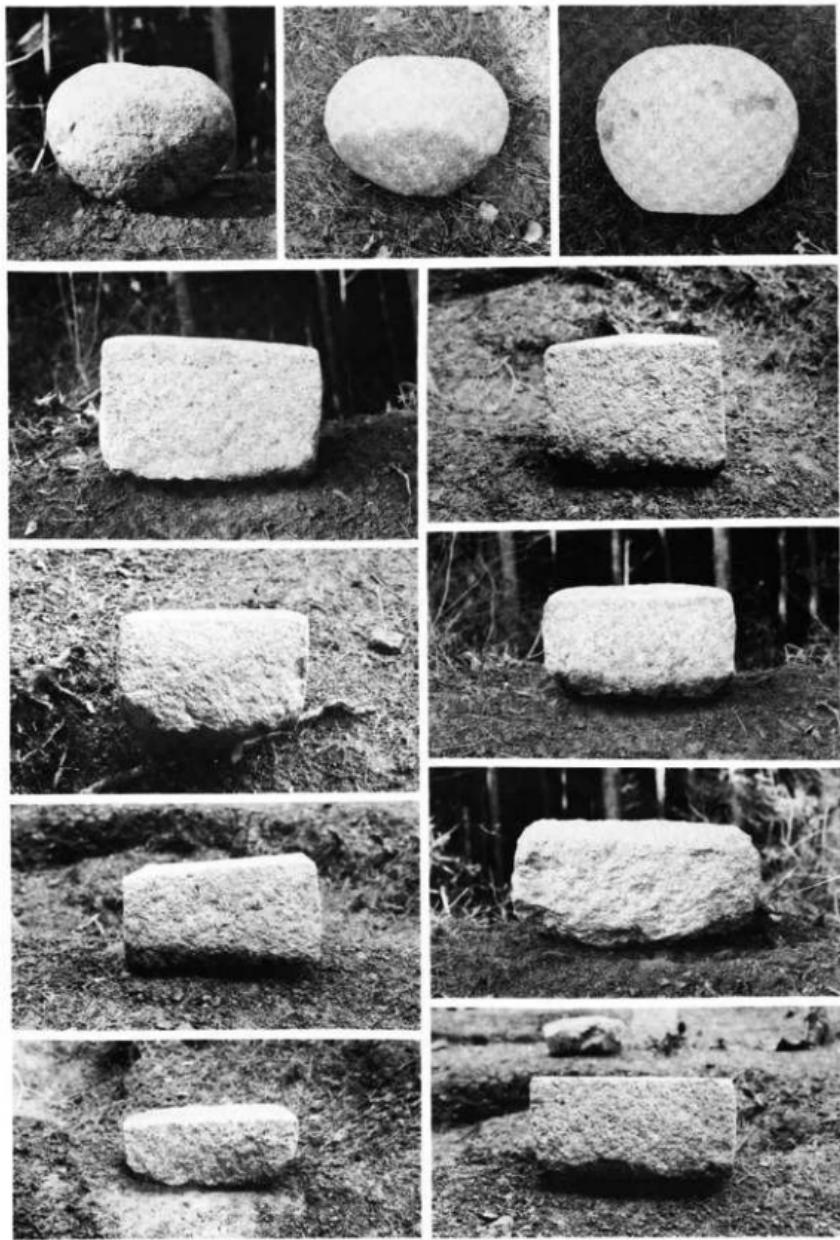
笠と台座が各々 1 点ずつあるが、出土状況より見て同一個体と考えられる。台座側面のうち一面だけ、格狭間を薄く彫込むが、格狭間の形態にはかなり退化がうかがえる。奉籠孔等は認められなかった。

その他

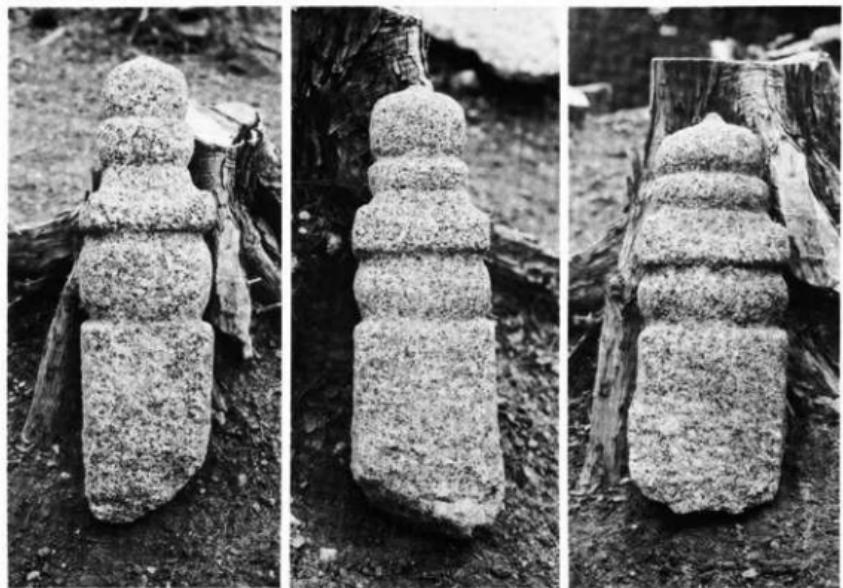
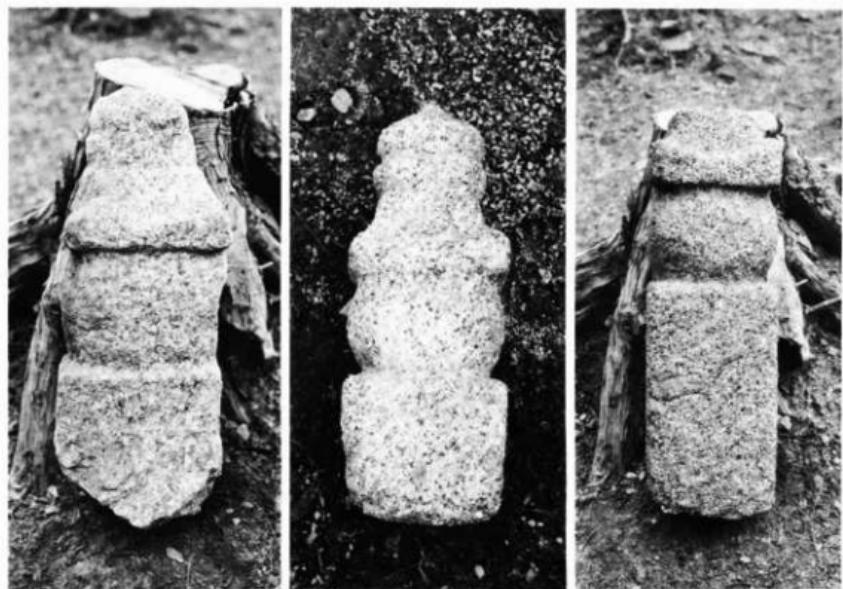
以上の石塔・石仏の他に、経筒を納めた石組みの上に置かれた「凸」字形をした台座が 1 点あるが、その上部



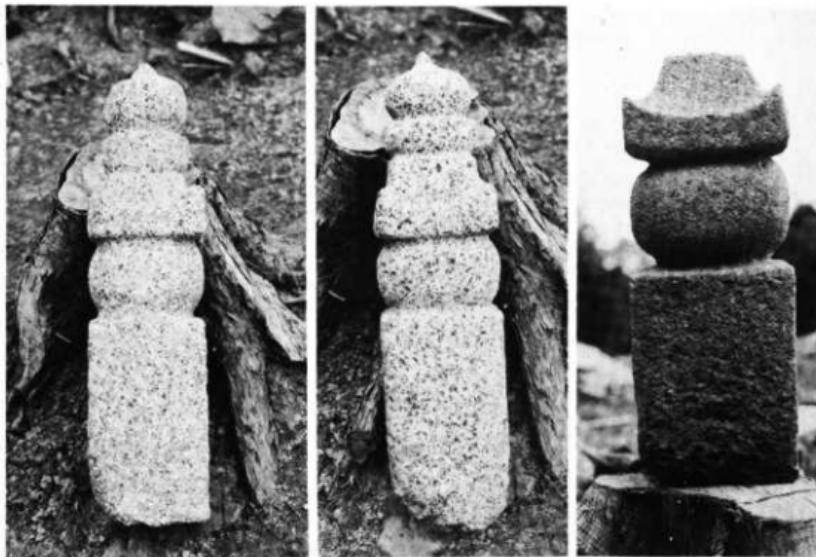
石造品1 (組合式五輪塔)



石造品 2 (組合式五輪塔)



石造品 3 (一石五輪塔)

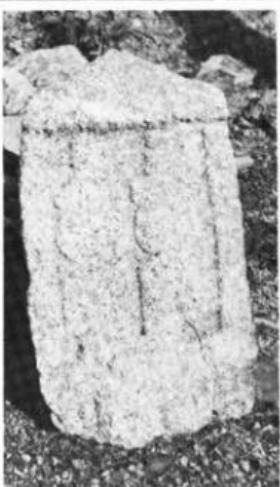
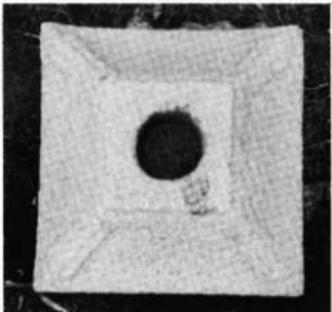


五輪塔

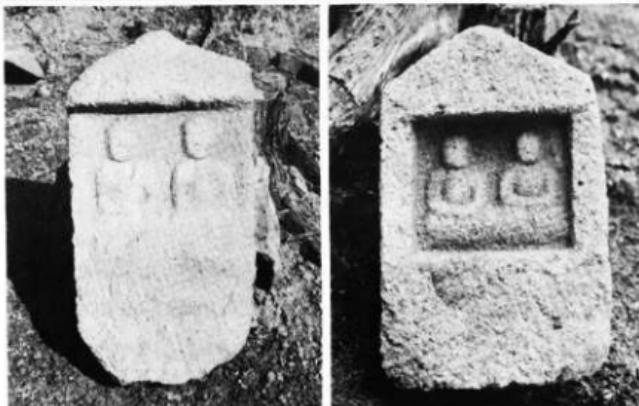
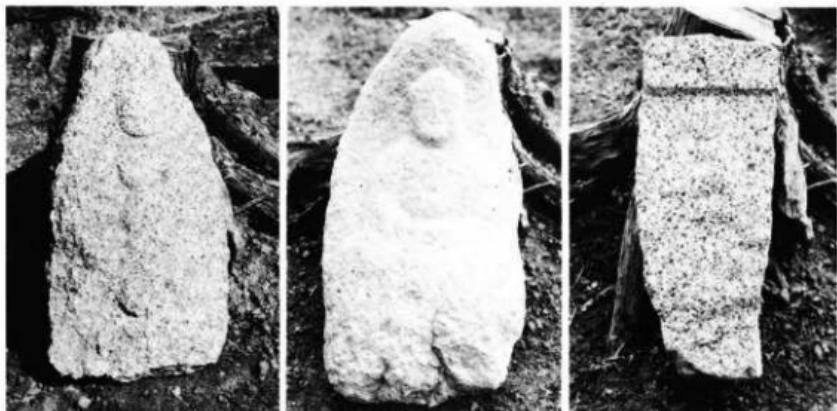


逆修
慶大徳

石造品4（一石五輪塔）



石造品 5 (宝塔・五輪塔板碑)



石造品 6 (石仏)

構造については不明である。

第Ⅶ章 総 説

横川の山中 — 龍山の地に営まれた中世墓地の構造は、以上概要に示したとおりである。一部保存のために未掘の部分や、墓地西端の平坦部が調査対象区域外となったりはしたが、中世墓地の一群の全貌を知ることのできた意義深い調査であった。

本章では、改めて総説し、その意義と問題点をのべたい。

墓地の地形

1. 墓地は、南北に伸びる山の鞍部から西に派生する支脈の南面に、上、下2段になって営まれている。そして、この墓地に至る道は、現在の山道と異り、西側の谷筋より登ってくるものと考えられる。

宝塔・経塚

2. 墓地は、東端の最高所に石造宝塔を建て、造成面の下段の一番奥まったところに、経塚を造営しており、墓地がその機能をはたしていた時期には、地上に何らかの小規模な構造物を有していたようである。

墓地の姿

3. 墓地内における埋葬の形態は、骨壺に火葬骨を納めたものに限定されている。墓地の継続時期は、遺物（土器、石造品）から見て、14～16世紀にわたるものである。しかし、同時期の村落の墓地によく認められる火葬場がないことから、他の場所で火葬して後、骨壺に納め、この地に運び埋葬したものと考えられる。

整理坑

4. 墓地内に整理坑が認められ、墓地の営まれていたある時期に、地表にあった石塔類の残欠を整理して埋めた可能性がある。

墓地の廃絶

5. 墓地の廃絶は、石塔類より見て、元亀2年の織田信長の焼打ちの時期に合致させられる。ただ、落地にまでは戦火はおよんでおらず、焼土などは検出されなか

った。おそらく、墓地を管理する塔頭の廃絶によって、荒廃し、延暦寺再興までの十数年間のうちに山野と化し忘れ去られたものと理解できる。

以上の諸事実より墓地の被葬者について考えると、次のようなことが言える。

被葬者の問題

靈山中世墓地が延暦寺の寺域内にあることは、当時の状況から見て、けっして一般的な村落や町の墓所とは言いたい。また、墓地の管理がゆきとどき、造墓の整然としたありさまや、藏骨器がほぼ同等かそれ以上の陶磁器によって構成されていることも、被葬者の性格を暗示するものであろう。本遺跡のように、中世の寺院境内や寺域内の墓地でその様相の明らかなものは少なく、比較するべき好例にとほしい。そのような数少ない例の一つである奈良市元興寺極楽坊の墓地の場合と比較してみよう。極楽坊境内の墓地は、室町時代中頃より営まれはじめると、境内の各地点によって藏骨器の器種や器形に違いのあることが指摘されている。それは、陶器類の巻形土器などを含む器形にバラエティの見られるものと、粗製の羽釜や火消壺形上器など日常雑器的なもので構成されているものとである。『大乗院寺社雜事記』を参考に復原するなら、前者が応仁年間頃から造墓をはじめた大乗院の院家に連なる人々のものであり、後者はそれより遅れて造墓しはじめた近在住民などによって構成された人々のものと考えられるのである。こうして見ると、室町時代における藏骨器の器種、器形の相違は、被葬者間の階層差によるものと理解してほは誤りなかろう。

そこで一転して、本遺跡の場合はどうであろうか。すでに見てきたように、藏骨器が陶磁器の壺を中心によまりがあり、しかも粗製の日常雑器類ではない。壺内お

より近江における最近の調査例から見て、庶民層の火葬墓は木製の櫃や曲物類、あるいは粗製の日常雑器の土器類が主流をなしている。このことは、元興寺極楽坊境内の墓地でもある程度指摘できる。こうした観点より本遺跡を考えた場合、けっして近在の村落や町の墓所ではないことは重ねて言うまでもないことである。今あえて結論を急ぐなら、次の二つが考えられる。

一つは、延暦寺の塔頭の墓地と考え、被葬者をその塔頭に関連する僧とする、その環境から見てごく自然に導き出される見解がある。このことは、現在の横川に営まれている僧の墓地が、同様な地形、位置関係にあることが一つの補強となろう。

いま一つは、横川のある塔頭の特定の僧に結縁した、延暦寺以外の人々の墓地とする考え方である。このことは、たとえば、歳骨器内の火葬骨の量が、常滑の大甕の肩まで多量に納められていたものと、比較的容積のある壺でありながら骨片をほとんど残さぬものがあることなどから、他の場所 — 延暦寺の外で火葬して後、分骨して横川に埋葬したこととも十分に考えられるのである。また横川が、恵心僧都以来の淨上思想の靈所であることも見逃すことができない背景である。墓地の整理が何度も行われながらも、火葬墓自体の整理のない事実は、そうした人々の依頼をうけて、塔頭が墓地を供養していたことの反映ではないだろうか。

ただ、こうした二つの見解から結論を導き出すには、まだ検討に多少の時間が必要である。(技師 兼康保明)

靈山遺跡発掘調査概要

昭和 53 年 3 月

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
助成 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社